



鳥取県は毎年何例かリュウグウノツカイが漂着し、中には生きた個体が目撃され、たびたび世間の注目を浴びます。私も6月末に自然館近くの漁港にリュウグウノツカイ（以下、リュウグウ）が入り込んでいるという通報を受け、新聞社やテレビ局からの取材を多く受けました。リュウグウについての情報の整理も兼ねて、少し詳しく解説してみようと思います。

リュウグウノツカイの謎

そもそも、リュウグウノツカイってどんな魚？



図1. A:リュウグウノツカイ, 2016年1月25日鳥取県鳥取市気高町湯村海岸に漂着, 体長410cm, 赤い三角は肛門の位置, 肛門より後方にある体(尾部)が非常に長いことが分かる. B:サケガシラ, 2017年5月9日鳥取県岩美町羽尾海岸に漂着, 体長158cm.



リュウグウノツカイは名前負けしないぐらい、「海の神秘」をそのまま形にしたような魚ですが、この魚の近縁な種も全て深海に生息し、変わった形をしています（図1A）。山陰海岸で同じように漂着するサケガシラは近縁な種のひとつです（図1B）。リュウグウは、細長いリボン状の形をしており、体表は鱗はあるものの、表皮に埋没して細かいイボのようになっています。生きた個体は、銀箔を貼った様に薄い銀色の膜に覆われていますが、死んで鮮度が落ちると触れるだけで剥がれてしまいます。肉質は水分が非常に多く含まれ、淡白な白身（薄い桃色）で、焼き魚にしてもゼリーの様な食感です。

日本で「リュウグウノツカイ」と呼ばれているものは学名で *Regalecus russellii* とされており、生息域は太平洋やインド洋、大西洋の温帯～熱帯域とされています。リュウグウの仲間（*Regalecus* 属）はもう1種知られ、日本で知られるリュウグウよりもやや寒冷な海域に分布しています（図2）。リュウグウの仲間の体長は8m弱に達しますが、日本近海では5mを越すのは稀とされ、鳥取県の記録では大きくても4mほどです。また、兵庫県の定置網から50cm未満の小型個体も見つかっています。

リュウグウの生態については断片的で、生活史は知られていません。鳥取県の記録ではオキアミなどのプランクトンを吐き出しており、富山県で胃内容物を調べた調査でも多くのオキアミが見出されました。また、体を垂直にし、背ビレをたなびかせて泳いでいることが知られています。その

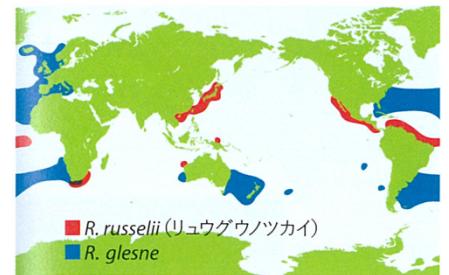


図2. リュウグウノツカイ属の分布。

中坊(2018)「小学館の図鑑Z 日本魚類館」第3刷より引用

ため、普段は深海で垂直に、半分漂いながら、プランクトンを吸引して生活しているものと考えられています。また、生きていた時は、体の尾部を触れると簡単に切れてしまうようで、それらが再生した跡のある個体も多いので、他の生物に襲われた際に^{しじつ}に自切をすることも言われています。しかし、大きく成長したリュウグウの捕食者の確かな情報は得られていないのが現状です。

リュウグウノツカイが打ち上がる謎

深海魚が打ち上がったたり、漁師の網にかかったりすると地震が来るという言い伝えがあります。実際はどのようなのでしょうか？

鳥取県のリュウグウの漂着・混獲記録を見ると、鳥取県中部地震が起きた 2016 年 10 月頃ではリュウグウの漂着はありません。また、2019 年 7～8 月に鳥取県東部にリュウグウの漂着が多くありましたが、周辺地域に目立った地震はなく、むしろその前の 2019 年 6 月に山形県沖で大きな地震がありました。また、全国的にかつ戦前の記録も含めて検証を行った研究もあり、地震発生の前触れとなる統計結果は示されなかったようで、地震の前触れとして見ることはできません。ちなみに地震が来るという言い伝えは日本ならでは、1990 年代以降に日本の新聞に取り上げられるようになりました。海外にはそのような言い伝えはないようです。

では、なぜリュウグウは打ち上がるのでしょうか？ もちろん、海洋生物が海岸に漂着する理由は様々なので、一概には言えません。例えば、山陰海岸では春先に貝殻が毎年大量に漂着しますが、冬の間の北西からの強風と波浪で物理的に貝殻が漂着しやすくなるためと、低水温で貝類が衰弱し、死亡するためと考えられます。春先は同じような理由で様々な生物が、死んだ状態や弱った状態で漂着します。リュウグウも同様に同じ時期に漂着しますが、それだけでなく、海が穏やかで水温の高い夏でも漂着します（この時期は他の生物はほとんど漂着しません）。夏に台風が接近し、海が荒れる時期もあり、その時期と重なる漂着もありますが、台風直後に漂着しないケースの方が多いです。全く穏やかな日に生きて状態でポツンと漂着することがあり、不可解なのです。例えば、生活史の特定のタイミングで浅い水深に移動したり、何かに追われたり、誤って浅い海域にたどり着いたなど、様々な要因が考えられます。

主な参考文献：Roberts T. R. (2012) Systematics, Biology, and Distribution of the Species of the Oceanic Oarfish Genus *Regalecus*. Mémoires du Muséum National D'Histoire Naturelle. / 中坊徹次 (2018) 小学館の図鑑 Z 日本魚類館 (第 3 刷). 小学館 / Orihara et al. (2019) Is Japanese Folklore Concerning Deep-Sea Fish Appearance a Real Precursor of Earthquakes? Bulletin of the Seismological Society of America

自然館のうごき

新型コロナウイルス感染症の流行による行動制限もなくなり、7・8月の来館者数は昨年よりも約 50%増加しました（7 月：2,151→3,173 名、8 月：2,021→3,021 名）。しかし、コロナ前の 2019 年は 7 月で 3795 名、8 月で 4,543 名だったので、まだ控えめと言えます。

夏のイベントでは、今年初めて 8 月上旬に「シーカヤック生き物観察会」、「ウミウシ観察会」を開催しました。シーカヤックは定員 20 名の 6 倍以上（120 名以上）の応募があり、大盛況でした。ウミウシ観察会では 10 名の募集に対し、4 名のみでしたが、その分参加者にとって濃い内容の観察となりました。（小矢野 旧姓：太田）



シーカヤック生き物観察会の様子
カヤックで普段行けないポケットビーチで生物を探す

表 1. 鳥取県内のリュウグウノツカイ漂着・混獲記録（2005～2022年）

日付	漂着/混獲場所	体長 (cm)	メモ
2005年7月23日	岩美町熊井浜	約140	鮮度悪い
2008年3月16日	岩美町東浜海岸	約300	オキアミ類を吐いていた
2009年7月29日	境港市瀬見町	109	
2009年11月20日	境水道（島根県側）	430	
2010年5月6日	八束水船磯港	446	
2013年1月19日	鳥取市砂丘海岸	381	
2014年3月2日	鳥取市白兔海岸	約190	
2016年1月25日	鳥取市気高町浜村海岸	410	
2019年2月24日	鳥取市青谷町夏治漁港付近	約360	
2019年7月20日	鳥取市青谷町夏治漁港（夏泊定置網）	約360/約250	2尾
2019年7月28日	岩美町羽尾岬沖（大敷定置網）	約100	
2019年8月4日	岩美町熊井浜	約300	
2019年8月7日	岩美町熊井浜	275	
2020年2月7日	鳥取市青谷町（崖下の岩礁）	約300	
2022年6月25日	琴浦町赤碕	??	尾が切れていた
2022年6月30日	岩美町田後漁港	約180	

2016 年以前の記録は鳥取県立博物館の研究報告から参照した。2017 年以降の記録は著者と鳥取県博で寄せられた報告に基づく。